■ 講演会の記録 ■

名字のルーツに見る日本人のくらしと文化

井澤市長　皆様こんにちは。市長の井澤でございます。本日は市史編さん着手記念歴史講演会「名字のルーツにみる日本人のくらしと文化」にお集まり頂き、誠にありがとうございます。国分寺市では市制施行六〇周年を迎え、市史編さん事業に着手いたしました。昨年度は市史編さん推進委員会を立ち上げ、委員会での議論を踏まえて基本方針を策定したところです。今年度からは推進委員会の下、市民協力員を含めた専門部会員四〇名以上が六月より編さん作業を進めています。今回の編さん事業は市民の皆様と協働で作り上げる市史を目指しています。このような市民向けの歴史講演会、講座等を開催して、地域の歴史に関心を寄せる市民の育成につなげるよう努め、研究者や行政職員だけではなく、次世代を担う若年層の参加も視野に入れて、市民の皆様との協働で進めてまいりたいと考えています。

森岡　浩

本日は大変著名な名字研究家であります森岡浩先生をお招きしました。すばらしい講演会になるかと思いますので、最後までゆっくりご拝聴ください。私もＮＨＫの「日本人のおなまえっ！」という番組で先生を拝見しております。私たちが自分たちのルーツを考える上で一番関心があり、知りたいと思うのが先生の研究されている名字ではないかと思います。本日は「名字のルーツに見る日本人のくらしと文化」について皆様と一緒に学びたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

司会　これからご講演頂く森岡浩さんのご紹介をさせていただきます。森岡さんは一九六一年高知県のお生まれです。早稲田大学政経学部にご入学され、在学中から独学で名字の研究を始めました。長い歴史を持ち、不明なことも多い名字の世界を歴史学や地名学、民俗学など様々な分野から多角的なアプローチで研究され、文献資

料だけに捉われない研究を続けておられます。『全国名字大辞典』、『日本名門・名家大辞典』、『四七都道府・県名字百科』など、多くのご著書を執筆され、ご参加の皆様もご承知かとは思いますが、二〇一七年から五年間、NHK番組「日本人のおなまえっ！」にレギュラー出演をされました。現在は家庭画報のウェブサイトで「名字三六五」という連載コラムを毎日掲載するなどご活躍の場を広げられています。本日の講演会は、身近な名字のルーツを探る方法や名字から紐解く先祖の暮らしぶりについてお話を頂きます。それでは森岡先生、よろしくお願いいたします。

森岡　今、ご紹介に預かりました森岡といいます。今日は「名字のルーツに見る日本人のくらしと文化」ということで名字の話をしたいなと思います。

さて、皆さん、自分の名前の由来はご存じですか。名前というのは下の名前です。おそらくほとんどの方がご存じだと思います。どうしてかというと、ご両親が教えてくれますね。どうやってつけたのか。もう本当苦労して、昔だと辞書をひっくり返してつけた名前もあれば、直感で決めたとか。私は「浩（ひろし）」といいます。今の天皇陛下（ご称号は浩宮）の一学年下です。大体類推がつきますね。私は次男ですので、親はあまり考えていないで名前をつけたと思います。長男はすごく苦労してつけたそうですよ。



森岡 浩 氏

では、名字の由来はご存じですか。ほとんどの方がご存じないと思います。どうしてか。ご両親も知らないのです。学校の先生も知らない、授業でも習いません。

誰も教えてくれないですね。今日もここで始まる前に職員の方とお話ししていて、市史編さん室職員ですから当然皆さん歴史の専門家の方ですが、自分の名字の由来はご存じないのですよ。まして普通の方が知るわけがない。でも不思議ではないですか。自分の名字はものすごく身近ではないですか。

例えば、一日に一回だけ自分の名字を言ったとしましょう。「私は森岡です」と。一年だと三六五回、一〇年で三，六五〇回言います。五〇年だと一八，〇〇〇回です。営業関係のお仕事をされている方だと、一日に一〇回も二〇回も言うでしょうから、考えてみるとものすごい数言っています。にもかかわらず、何でそういう名字だろうというのをほとんどの方が知らない。なので、今日はそういう名字の話をしたいと思います。

まず、皆さん名字と名前はありますか。ありますね。それぞれ一つずつですか。もちろん、なかには「いやペンネームがあるよ」とか、「芸名がある」、「途中で変わった」とかあるかもしれませんが、現在戸籍に登録しているのは、名字が一つに名前が一つだと思います。「いやいや、そんなの常識に決まっている。当たり前でしょう。」と思うのですけれども、本当にそうなのでしょうか。

外国の例を見てみましょう。来年一月に大統領になりますアメリカの「ドナルド・ジョン・トランプ」。普通、「ドナルド・トランプ」といいますが、本当のフルネームは「ドナルド・ジョン・トランプ」といいます。通常はジョンを言わないです。これはミドルネームといって、実は「名前＋名前＋名字」で構成されています。これはアメリカでは普通です。アメリカでは言わなくても大抵真ん中にもう一個名前があります。

次は「リュドミラ・アレクサンドロヴナ・プーチナ」。プーチン大統領の奥さんは「プーチン」ではないです。「プーチナ」といいます。実はロシア語は固有名詞、人名にも名字にも女性形があるのです。フランス語にも言葉に男性形、女性形があります。ロシア語は名字にもあるのです。プーチンでNで終わります。女性には最後Aがついて「プーチナ」になる。オリンピックでロシアのフィギュアスケート選手がみんな「〇〇ワ」とか「〇〇〇ナ」で終わるのは女性形のAで終わるためです。

テニスプレイヤーの「伊達公子」さん。「クルム」さんと結婚し、「キミコ・ダテ・クルム」になりました。ヨー

ロッパは結婚したときに名字をつなげていいのです。つなげなくてもいいです。選択制です。伊達公子さんはつなげました。「名前・名字・名字」ですね。ちなみに離婚されて今、元の「伊達公子」に戻っています。

最後、「サウド・イブン・アブドル・アジズ・イブン・アブドル・ラーマン・アル・サウド」。これで一人分の名前です。サウジアラビアの建国の父、これがフルネームなのです。意味は、アル・サウド一族のアブドル・ラーマンの息子のアブドル・アジズの息子のサウドで、イブンが子どもという意味です。後ろからいくそうです。こうなったら、我々の考えている名字や名前の概念を超越しています。サウジアラビア建国の父なので、世界、外国の人名辞典に載っています。何と載っているかというと「イブン・サウド」と載っています。

欧米では名字や名前が複数あるのは当たり前です。ロシアでは、名字にも女性形があります。アジアでは、名字という制度がない国もあります。つまり、名字一つに名前一つというのは東アジア、さらに言えば、日本、中国、韓国、台湾辺りで、決して世界的に常識ではないのです。その中でも中国、台湾、韓国は、名字の種類が少ないです。韓国は最近、外国から帰化する人が増えて、名字を新しく作りますが、それを除いて純粋な韓国の名字は三〇〇ないといいます。中国の少数民族を除いた漢民族の名字は数千ですが、人口が一〇億で数千です。日本は一〇万以上あります。つまり名字と名前が1つずつ、かつ種類がたくさんあるというのは、日本独特の制度なのです。そういう日本の名字のルーツ、文化をぜひこの機会に学んでいただければなと思っています。

先ほど、名字のことは誰も教えてくれないと言いました。名字というのは歴史的なものですが、学校の日本史の授業で名字の話はまず出てきません。大学で日本史を専攻してもちゃんと習うことは多分ないと思います。

姓というのがあります。名字や氏ともいいます。これ同じでしょうか、違うでしょうか。今は、名字も姓も氏も全く同じ意味で使います。しかし江戸時代には全く違うものでした。氏、昔は「うじ」と読みました。氏というのは大王家（天皇家）の先祖で、各氏族に対して与えたものです。昔の一族全体に「○○氏」というのを与えます。それを聞くことで「この氏の人たちは○○をやっているのだな」と立ち位置や仕事などが分かります。物

部と聞くと軍事、中臣と聞くと宗教だと分かるのです。どういう一族なのかなというのが分かる、これが氏です。

その後、姓というのがある。姓というのは天皇家の分家です。平とか源とか。奈良時代以降、氏と姓は統合して全部、姓という形になります。天皇家は与える側なので、姓はないです。与える側はなくても大丈夫、一人しかいませんし。昔もそれなりの氏がいました。平安時代になると弱小の氏族がどんどん淘汰されて、特定の一族ばかりになるのですね。

朝廷は藤原氏だらけになってしまいます。みんな藤原だと困りますね。どうするかというと、その中で家単位を区別するために名乗り始めたのが、名字なのです。つまり姓が古くからあるもので、名字は後からできた。一定以上の地位の人は、姓と名字を両方持つのが普通でした。「私は藤原氏です。そしてうちの家は一条です」とか「九条です」というように、両方持っているのですね。簡単に言うと、姓は古代に天皇から与えられた公的なものです。天皇から許可を取るなどして、途中で姓を変えた人もいますが、原則変更はできません。藤原氏の子孫はどこまで行っても藤原です。対して名字というのは、その一族の中で「うちの家はこれだよ」という、自分で勝手に名乗ったものなので自由に変更できました。

氏というのは、実は現代の法律用語です。法律的には氏名が正しいです。姓名でも名字・名前でもなくて、氏名が法律的には正しいです。

今は全部ごっちゃです。「私の名字は」と言っても「私の姓は」と言っても構わない。「私の氏は」と言う人はいないと思いますけどね。でも何となく、きちんとした書類だと「姓名」、日常会話だと「名字」と言うことが多いというのは、これが何となくあるのでしょうね。頭の中にというか文化的にというか。

ではその姓と名字、どうやって区別すればいいか、簡単に言います。姓名間に「の」が入るのが姓です。入らないのが名字です。藤原道長、菅原道真、源頼朝。「の」入りますね。藤原も菅原も源も姓です。足利尊氏、織田信長、徳川家康。「の」は入らないですね。足利も織田も徳川も名字です。古い人は姓と名字、両方持っている人がいます。例えば足利尊氏、足利が名字です。姓は何かというと源です。武田信玄も源です。北条義時は平です。上杉謙信は藤原です。このように昔のある一定以上

の地位の人は、名字と姓を両方持っています。日常的には名字を使いますが、公的な書類に書くときは姓を使う人が多いです。マイナーなのがあります。長宗我部元親（秦姓）の秦という姓は外国から来た人が名乗った姓です。朝倉義景も日下部姓を持っています。古い資料を見ると時々自分が知っている名字と違う、「源」とか「平」と書いてあったりする資料にぶつかることがありますが、それは公式な書類なので姓を書いているのですね。

ではこういう名字、いつから自分で勝手に名乗り始めたのか。はっきりしたことはわかりません。公家や武士は平安時代の中期か後期ぐらいかなと。

では、庶民はどうでしょうか。庶民の名字がいつからあったかというと、私よりの上の世代の人は、庶民は江戸時代に名字がなかったと学校で習ったと思います。今はそう教えていません。実は庶民も江戸時代以前から名字があったと、今はわかっています。いつからかはわからないのですが、鎌倉時代か室町時代頃だろうと。なぜわからないかというと、庶民の資料は残っていないのです。庶民の紙資料が残るのはおおよそ江戸時代以降です。それ以前、紙は貴重ですから。室町時代からは、確実に庶民の名字はありました。鎌倉時代にもあったと言う人もいますが、わかりません。明治になって勝手に庶民が名字つけたとすれば、人口の９割が庶民なので、名字のルーツは探れなかったです。江戸時代以前も名字を名乗っていたからこそ、名字のルーツが探れるのです。

では、なぜ名字が古くからあったとわかるのかというと、和歌山県紀の川市の王子神社に、室町時代からある国指定有形民俗文化財の「名つけ帳」というのがあるのです。子どもが生まれると、王子神社に行って登録する。「こんな名前つけました」というその農民の名前が載っていて、右上に名字が書いてあります。

「岡田さん」が多いのです。紀の川市の粉河に行きますと今でも岡田さんが多いです。子孫なのでしょう。逆に言うと、粉河の岡田さんの先祖はここなのです。この時代から岡田を名乗っています。つまり、これを見ただけで、少なくともそこの人たちは室町時代から代々名字を名乗っていることがわかるのです。粉河は普通の農村ですから、これ以外の地域でも室町時代くらいから名乗っていただろうと思われます。

ただし、江戸時代になると庶民は公式な場所では名乗

ることはできませんでした。逆に武士は名字を名乗らないといけません。名字のない武士というのはあり得ません。公式記録にも、庶民の名字は記載されずに名前だけ記載されました。すると、その後一〇〇年、二〇〇年経って、歴史の資料だけ見た人が、庶民には名字が一切書いていません。武士には全部名字が書いてあります。「武士は名字がありました。庶民には名字はありませんでした」と誤認されてしまったのです。

割と早い時代に実はわかっていたのです。では私たちがなぜ「名字がなかった」と習ったかというと、小学校の教科書に「江戸時代、武士以外は名字を名乗ることができなかった」と書いてあった。「名字がありませんでした」と書いていないでしょう。教科書は検定が入っていますので正しいですね。教科書の記述を見て「名字は昔はなかった」と教えられてしまっていたのだと思います。

武士以外の名字の例です。小林一茶は、長野県の人です。「小林」が名字で「一茶」が名前ですね。長野県で一番多い名字が小林です。特に一茶の出身地は小林だらけなのです。小林一茶の家は農家で、一度も武士になっていません。農家ですけれどもちゃんと「小林」という名字を名乗っていて、みんな小林が名字だと認識していますね。農家でも名字があります。

坂本龍馬は江戸時代の幕末武士です。でも実は坂本龍馬の家は分家なのですよ。本家は商家です。その商家の名字が「坂本」なのです。商人にも名字はあるのです。

明治になって戸籍制度ができました。江戸時代に戸籍はありません。明治になって初めて戸籍ができます。そのときに新しく「氏（し）」という概念を作ります。「姓でも名字でもいいから、一個だけ登録するように」と。「二個持っている人も一個だよ」と。一個しかない人はそれを登録します。ない人はここで何か作るしかない。必ずみんな一個だけ登録して、それを変更することを禁止したのです。ここが大事です。江戸時代以前の名字は、勝手に変えていいのですよ。特に中世では、兄弟みんな名字が違うとか、親子で名字が違うというのも当たり前のようにあります。幕末には、討幕志士は何か事件を起こすとまずいので、名前を変えてしまいます。追及を逃れるために。それでは困るので、明治政府は変更禁止にした。ここで今の名字が固定します。この後、原則変更できな

くなります。名字が固まったのは明治の初めです。

次は名字のルーツをお話ししたいと思います。名字のルーツは、大きく八分類です。①地名由来、②地形風景由来、③方位由来、④職業由来、⑤藤原氏由来、⑥僧侶由来、⑦拝領した名字、⑧独特の由来。名字を見ただけで、わかる人もいると思います。①から⑤の中にほとんどの人が入ると思います。⑥、⑦、⑧は少ないです。

では、①の地名から。名字の基本は地名です。これが圧倒的多数です。名字というのは、家と家とを区別するためにあります。家と家とを区別するためにどうするのか。「どこどこに住む誰それさん」の「どこどこ」の部分を固定したのが名字です。例えば、親戚が集まるとき、親戚なので名字が同じですね。すると、「東京の」おじさんとか「大阪の」おばさんとか、「どこどこの」と言いますよね。昔の人はずっとそこに住んでいて「どこどこの」が固定されるので、それが自然と固まったものが名字です。そのため、名字の基本は地名になるのです。大字、小字というのはその昔使っていた地名です。同じ地名は全国に結構ありますので、ルーツは複数あると思ったほうがいいです。よっぽど特殊な地名でない限り。

例えば「埼玉（さいたま）」さん、珍しい名字です。埼玉さんのルーツは、埼玉県でもさいたま市でもないです。埼玉県行田市に「ここは埼玉」とあります（図1）。埼玉さんのルーツはここです。

「渡辺」さんも、大阪市内の渡辺という地名です。梅田から南のほうにずっと下っていったところ、大阪のど真ん中です。そこに以前、渡辺という場所がありました。「渡しの辺り」という意味で、昔、大阪湾が大きく内陸まで入り込んで港だったのです。「渡しの辺り」が「渡辺」という地名になって、そこに住んだのが渡辺さんです。大阪の中心部なので、地名の整理があります。昭和の頃に、大阪市が渡辺という地名をなくすと決めました。すると、全国の渡辺さんが反対したのです。渡辺さんのルーツのある地名を潰すとはいかんと。こういうのは実は各地であるのですけれども、ほとんど無視されて地名がなくなります。しかし渡



図1 「ここは埼玉」と表記された電柱

辺は、全国の渡辺さんが反対運動をした結果、折衷案として残ったのがこれです、「大阪市中央区久太郎町四丁目渡辺」。普通、四丁目の下は番地の数字ですよね。ここが渡辺さんのルーツの場所だから少し無理に残しているのです。

では多摩地域の場合どうなのか。平安時代、関東地方には武蔵七党という武士団がいました。最も早く名字を名乗った一族ではないかとも言われます。はっきりしないですけれども。名字の研究をしているとすごく重要な一族なのです。具体的に言うと、横山党、児玉党、猪俣党、丹党、村山党、西党、野与党、私市党、綴党です。範囲も、横山党はかなり広くて、多摩を中心に神奈川の西部から埼玉の西部までずっと広がっています。児玉党も埼玉から群馬まで広がっているとか、広い範囲に一族が重なって幾つかあります。

この特徴としては、関東の西部に広がっていって住んだ土地の地名を、みんな名乗っています。これが武家における名字の始まりなのではないかと言う人がいます。武蔵七党は源平の合戦で源氏方に属するので、その後各地に所領をもらい、そこに移り住むのです。ですから関東で一族だった人たちが全国に散らばっていってその名字を地方に伝えます。大事なのはここです。詳細な系図が残っているのです。ルーツが調べやすい。いろいろな名字のルーツを調べていると結構、武蔵七党に行きつくことがある。ですから、多摩地域というのは、名字の研究において大事な場所なのです。

国分寺付近は、さっきの武蔵七党の西党の勢力範囲に入ります。どんな一族がいたのかと言うと、平山氏とか立川氏、川口氏、由井氏、田村氏、小川氏、小宮氏です。みんな名字を名乗っています。何となくあの辺かな、とわかる地名ではないかと思います。平山氏は分かりやすいですね。日野市平山（図2）。ここに城址があり、平山城址公園という駅もあります。平山に住んだ西党の武士が名乗ったのが「平山」という名字で、ここに平山城を築いて住みました。

川口氏、これ埼玉県の川口ではないです。西党の川口のルーツは、八王子の川口町です（図3）。川口というのは「川の入り口」という意味なので各地に地名があります。西党の川口のルーツは八王子の川口。

こういうふうに西党に限らず武蔵七党の一族は、関東

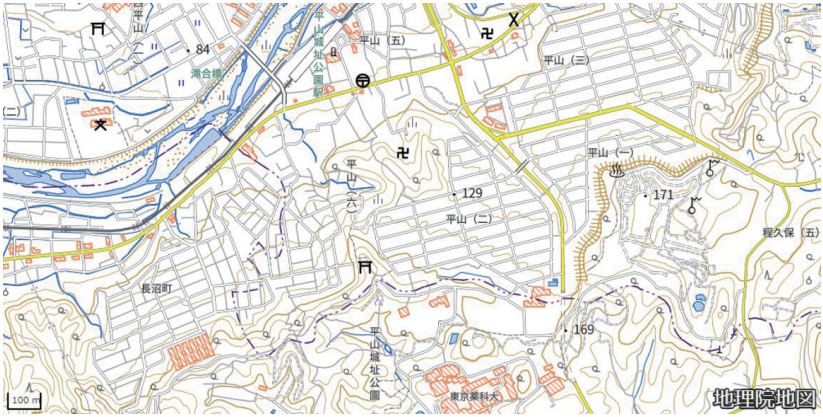


図２　日野市平山

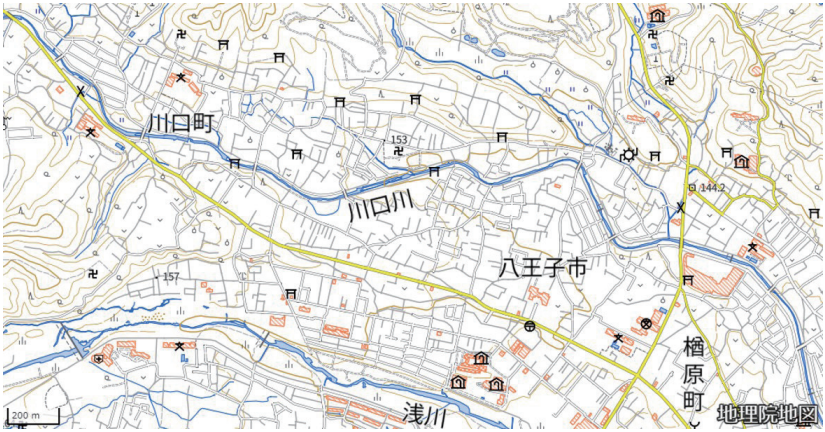


図３　八王子市川口町

西半分の各地に住んで、その名字を地名として名乗って、今に伝えていることが多いです。

では次、②地形や風景に由来する名字。日本は人口密度が高いですね。そうすると同じ場所に家がたくさんあります。みんなが地名を名乗ったら、区別がつかなくなります。名字というのは家と家とを区別したいわけですから、みんなが同じ名字だったら意味がないです。そうすると地名を名乗る以外のことで、名字をつける必要がある。ではどうするのか。有力者とか、本家とか、最初に開拓したとかいう人以外は、何か地名以外に家の地形とか風景で区別する。例えば、松の木の下にあれば「松本さん」だとか、神社の下には「宮本さん」とか、山の下に住んでい

る「山下さん」。「自分の家はここにあるのだよ」ということを名字で言いたい。地形、風景が名字に使われる漢字は大体固まっています（図4）。

家のある場所、地形で区別する。山、岡、窪や、川とか。または原、林、森。地形を名のっている。家の所有するもの、田んぼとか畑、園というのも畑です。そういうもので区別をする。家と関連する建造物のお寺、宮は神社ですね。あと、日本で多いのは家の近くの木の種類で区別をします。松、杉、桜など。「桜の木の下にいる」とか、「杉の木のところにいる」と。外国ではあまり見ません。もちろん外国で「Pine」さんとかいるのでしょうけど、多くはないです。松、杉、桜、榎、桐、梅、栗、柿、椿。今、松と杉、桜は木を見てわかると思いますが、桐や榎は見ただけでわからないですよね。昔の人は常識的にわかったのです。「あれは榎の木だよ」と見ただけでみんなわかったの。榎本と言ったら、周りに「ああ、榎の木はあそこにあるからあの木のあの家か」とわかる。それくらい昔の人は木に親しみがあったというか、近かったのだと思います。

他にも例を挙げましょう。山の麓に家があります。今、家建てるときというのは平地に建てますけれども、やはり昔の日本では、山の麓に道が一本走っていて、そこに家が建っていて、平地は田んぼにします。つまり、家というのは山の下にあるのです。山下とか山本がどうしても必然的に多くなる。場所は同じです。山下と

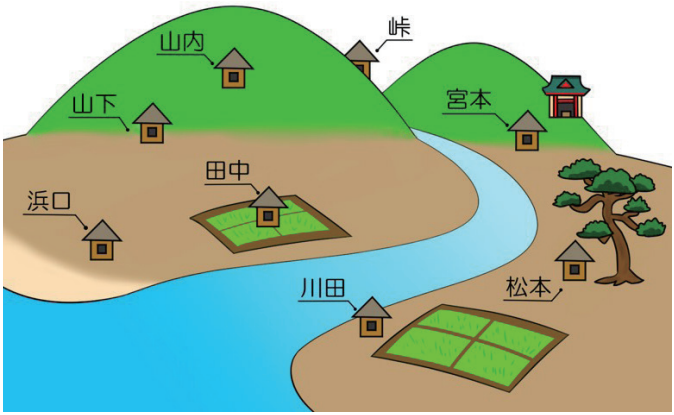


図4　地形や風景に由来する名字

いうのか山本というのか、それはその人の感性、その地方の習慣で決まります。

「沢」がつく名字も多いです。沢というのは山の中の川です。なぜ沢がつく名字が多いのか。沢というのはすごいところなのですよ。昔は電気もガスも水道もありません。スーパーもありません。全て自給自足です。沢はまず水が流れていて水が汲めます。水が一番大事で、昔は水をまず確保しなければいけない。沢には魚が泳いでいて食料が確保できます。沢は山にあるので、山に入って薪を拾うことができます。燃料ですね。水が取れて燃料が取れて食べ物が取れる。昔、沢というのは一等地で皆さん沢に住みたがります。そのため、沢がつく名字が多いのです。

もう一つ、昔の人は谷間に住みたがります。今は平野ですよね。昔の人は平野に住みたがりません。なぜかと言うと、平野の真ん中に住んでいると、どこから敵が来るかわからない。平野の真ん中というのは大抵大きな川が流れています。昔は、護岸工事は何もしていませんから、大雨で氾濫します。すると、家も田んぼも流されてしまうかもしれません。基本的に、昔の人は谷間に住んでいます。そこを支配していた武士が、入口の辺りに住んで入口を固めて守る。農民はその後ろ。谷間は大体川が流れていますから、そこで田んぼを耕して住む。ですから谷がつく名字が多いし、いろいろな言い方があります。関東では「やつ」とか「やと」と言います。西日本では、迫るという字書いて「せこ」とか「さこ」とか言います。「大迫さん」というのは「大きい谷間」という意味です。

それから意外な風景、地形由来です。「鈴木」さん。全国どこでもそうですけれども、田んぼで稲刈り取った後「藁塚（わらづか）」というのを使って稲を干します。地域によって形が違うし、呼び方も違います。和歌山県では、これを「すずき」と言います。「すすき」とか「すずき」と方言で言います。これにちなむのが鈴木さんという名字、当て字です。ほかの「すずき」はなかなか思いつかないですね。和歌山県は熊野信仰が盛んだったので、熊野信仰とともに全国に広がっていきます。ですから鈴木さんのルーツは、こういう藁塚にちなむ風景です。

「井」。これも多いですね。「○井」や「井」で始まる名字も多いです。今は「井」と言うと井戸のことかと思

うかもしれませんが、皆さんが思い描いている井戸ができたのは江戸時代です。古い時代には、日常生活に必要な水を得る場所を全て「井」といいます。例えば生活に必要な水を川で汲みます。「川で水を汲むこと」も「井」です。田んぼに水を引く用水路も「井」です。このため「井」がつく名字が多いのです。

こうして見てみると、名字ができた時代は平安の終わりから鎌倉、室町と昔のことなので、今とはちょっと違うものが多いですね。今のことだけで考えずに、違う意味もあるということが頭の片隅に入っているとわかりやすくなります。

それからもう一つ、漢字は当て字が多いです。「くま」のつく名字。「くまもと」、「くまだ」など。皆さん、「熊」が思いつくかと思います。実は、「くま」は、「山が襞になって奥まった場所のこと」と辞典引けば出てきます。山というのは真っすぐではない。襞になっていますね。すごく襞になって奥まることを「くま」と言うのです。漢字だと大隈さんの「隈」とか、あるいは「久しい万」で「久万」とかいろいろな当て字します。漢字は当て字が多いです。名字に限らず地名もそうですけれども。

あと「くら」のつく名字も多い。「おおくらさん」に「私、おおくらと言うのですけれども、先祖は大きな倉を持っていたのですかね」と聞かれたことがあって、答えづらいのですよね、なかなか。古い言葉で岩肌が露出した崖地のことを「くら」と言います。そういうところに住んでいた方です。漢字を後から当てます。いい漢字を当てたいのです。倉庫の「倉」とか「蔵」とか。漢字は当て字です。

あとこれどうですか。埋め立てた土地。江戸時代以降になると埋め立てが結構広がります。どこの藩も田んぼで米を増やしたいのでどんどん埋め立てて水田を作ります。埋めた土地、「埋○」は縁起があまりよくないので「梅」という漢字を当てます。大阪の梅田はこれです。大阪の梅田は埋め立て地です。

あと「葦」という植物がありますね。今あまり見ないので分からないと思いますけれども、昔は葦という植物は日常生活で使いました。葦ということはやはり縁起が悪いですよ。葦が悪い意味につながるので。「よし」と言い換えます。今も「よしず」とか言いますね。この「ヨシ」に漢字当てます。「吉」と当てます。一面に葦が茂って、

本来「あしはら」です。でも「あし」は「よし」と言い換えます。「吉原（よしはら）」になります。吉原さんのルーツはここにあります。こういう「吉」「福」や「幸」など、漢字というのは縁起を担いで当てることが多いです。

次は③方位。まず基本は地名でした。でも「そう言っても地名だって厳しいよ」というので地形とか風景でつけましたが、やはり人口密度は日本高いですよね。「同じところに住んでいて同じような場所に家何軒もあるよ」と。ではそれ以外に何かつけなくてはいけない。方位、方角、そんなものに由来する。本家や村の中心から見て、どちらに住んでいたか。基本は東西南北と中。ほかに「乾」も方角です。北西のことを「乾」、南東のことを「巽」と言います。これも方位、方角に由来しています。

「中村」というのは「真ん中の村」ではなくて「村の中心」です。すぐ東に住んでいる人は「東」さん。あと南で田んぼ耕している「南田」さんとか、西のほうで川の麓は「西川」さん。北のほうの山の麓「北山」さん。こうやって区別しています。方角と地形を区別することでバリエーションを増やしていったと言います（図5）。

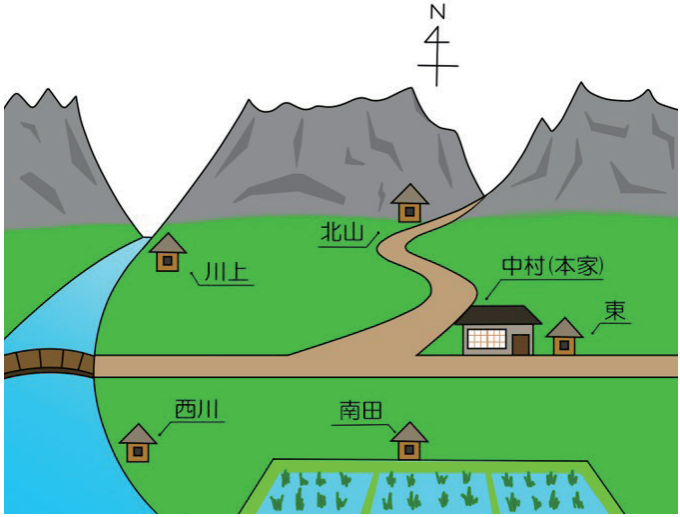


図5　方位や方角に由来する名字

もっと別の由来があります。何かというと④職業。今は職業自由ですから、皆さん親と同じ職に就くとは限りません。違う人も多いと思います。古い時代というのは公的な職業に由来します。例えば、今「鵜飼」さんとか「猪飼」さん、「鳥飼」さんとかいますけど、大

昔は鵜を飼うとか猪飼うというのはちゃんとした朝廷の仕事なのですよ。ずっと鵜を飼っていた家というのは「鵜飼」さんです。もうすこし時代が下ってくると「荘園」という田んぼができます。荘園を管理した人を「しょうじ」と言い、いろいろな漢字を書きます。「庄司」「荘司」「庄子」、「東海林」も「しょうじ」です。これ何で「しょうじ」と言うかというと、もともと「とうかいりん」だったのですよ。山形県に「とうかいりん」という名字があります。この「とうかいりんさん」が秋田に移って「しょうじ」という役職に就きます。すると「とうかいりん」さんが「しょうじ」になったので、漢字はそのままに読みが「しょうじ」に変わったのです。なので今では秋田県は「東海林（しょうじ）」さんで、山形県は「東海林（とうかいりん）」さんです。

この荘園の管理の下のほうで実際のいろいろな細かな実務をする人がいます。公文とか下司といいます。公文式の公文ですね。公文さんは昔から荘園の管理をして実務やって計算したのですね。

あと「服部」さん。これ「はっとり」というのは皆さん、当たり前に読んでいますけれどもどう考えても「はっとり」と読めないですね。もともとは「服織部」と書いて「はたおりべ」という職業です。「はたおりべ」が「はっとりべ」になります。その後、昔は地名もそうですけど、名字というのは基本漢字二文字がいいのです。そうなると真ん中の「織」が取れてしまったので「服部（はっとり）」という全然かみ合ってないようにできてしまいました。「服を織る」というのが「服部」さんです。忍者になったのはもっとずっと後です。

江戸時代以降になると、今度は実際の商家などもいます。越前屋、越後屋とかあります。加賀と取引しているお店が「加賀屋」になります。越前と取引していると「越前屋」になります。そういう地名をくっつけているものと、「いや、うちは米屋さんだよ」「紺屋さんだよ」というものがあります。こういった家が明治になって戸籍にそのまま登録した家が結構あります。今でも「越前屋」とか「堺屋」という名字あります。「米屋」とか「紺屋」という名字もあります。でも「やはりこれちょっと名字っぽくないよな」と感じた人もたくさんいるわけです。ではどうしたのかというと「屋」を「谷」に変える。「大坂屋」だったら「大坂谷」と書いて「おおさかやさん」。「米屋」さんだと「米谷（こめたに）」さんになります。このパターン意

外と多いです。それからもっと大胆なのは「屋」を取る。「越後屋」さんが名字を作るときに「屋」を取って「越後」という名字で登録した。「大坂」もそうで、テニスの大坂選手、多分元は「大坂屋」だと思います。

最初のところで「名字は地名に由来する」と言いました。今「越後」と聞くと、「ああ、越後の国に由来するのだな」と思いますけれども、名字に使う地名は小さな地名なのですね。越後の国なんていう大きなものに由来する名字はまずないです。

それからもう一つ、これは最後のメジャーな由来で⑤藤原氏に由来する「○藤」という名字。「とう」と言いますね。「ふじ」とは言わない。これは平安時代、藤原氏のことを「藤家」と言ったことから生まれた名字です。平安時代、二文字の姓は中国風に漢字一文字で言うことがあったのですね。当時の中国は最先進国なので中国風に名乗ります。藤原氏は「藤」だけ取って「藤家」と言います。清原氏は「清」を取って「清家」と言いました。なので「清少納言」になります。「清・少納言」ですね。同じく、菅原氏は「菅家」と言います。ですからこの時代というのは「藤」と聞くと、「藤原氏の一族だな」というのがそれだけで分かる。藤原氏の分家と本家といった辺りになってくると、名字を名乗ります。そのときに、まるっきり変えてしまうと自分が藤原氏の一族と誰も分からないですよね。「○藤」と言うと、昔の人は聞いただけで「ああ、あの藤原氏の分家なのだ」と分かるのですよ。「地名＋藤」とか「職業＋藤」で生まれた名字というのがあります。分かりやすく言うと「加藤」というのは、「加賀の藤原」さんです。「伊藤」は「伊勢の藤原」さん、「近藤」は「近江の藤原」さんです。「近藤」と聞いただけで「何か近江と関係ある仕事をやっている藤原氏の一族だな」という情報がこれだけから入ってくる。だから便利で、使うのです。「職業＋藤」もあります。「工藤」は、朝廷に、木工寮という朝廷の修繕とかする役所がありますが、そこの役人が名乗ったのが「木工寮の藤原」さんなので「工藤」です。そうやって地名や職業とくっつけていく。種類はそんなにないのだけれども人口的にはかなり多いです。代表は「さいとう」ですかね。伊勢神宮に「斎宮」というのがあります。今でも跡が残っています。伊勢神宮に奉仕した皇族の女性のことを「斎王」と言います。斎王のいた場所が「斎宮」で、そこを維持

した役所が「斎宮寮」と言います。ここの長官だった藤原さんが「斎宮寮」の「斎」と藤原の「藤」を取って「斎藤」と名乗ります。

ここまでほとんどの名字が入っているはずです。ここからはちょっとマイナーになります。⑥僧侶由来の名字です。昔、江戸時代以前も庶民の名字があったと言いましたが、名字のない人もいました。代表がお坊さんです。お坊さんは、名家の出身の方が多くて、皆さん名字は持っていたと思うのですけれども、お坊さんになるとき名字を正式に捨てます。そのお坊さんにも明治政府は「名字をつけろ」と命令します。どうしたかというと、仏教用語とか経典に由来するものから、独特な名字を作り出した例が多いです。一番多いのは「釈」です。「お釈迦様」の「釈」。ほかにも「梵」と書いて「そよぎ」と読みます。あと「禿（とく）」「宇宙（うちゅう）」「無着（むちゃく）」。例えば「宇宙」という名字は、明治以降に勝手につけた雰囲気が漂っていますが、実は、「宇」というのは空間の広がりを指し、「宙」というのは時間の広がりを指します。なので「宇宙」というのはあらゆるものを包括する空間のことを指す、お坊さんが名乗った名字です。お坊さんの名字は難しいものが多いです。お坊さんは結構人数はいらっしゃるので、お坊さんの子孫の方も多いかと思います。

次が⑦拝領した名字、昔は名字を与えるということが結構あったのですね。殿様が家臣や領民に褒美として与える。中世だと戦で活躍すると殿様は領地をあげますが、日本中そのうち領地がなくなってしまうので、領地を与えたくない。手っ取り早いのが名字を与える。殿様が自分と同じ名字を与える。これは親戚と同じ扱いするという意味ですから、ものすごく名誉です。これをもらうとみんな、自分の名字は捨てて、その名字に変えます。江戸時代の家老だと、藩主から名字をもらって、藩主と同じ名字を名乗る家老もいっぱいいます。明治になって、元に戻した家と戻さない家があります。主人が分家した奉公人に与えるということもある。いずれにしても名字をもらうというケースはそれなりにあったようです。

でも、みんながみんな、ちゃんといい名字をもらえたわけでもないというか、好んでもらったわけでもないというか。淡路島に昔、立派な鯛が獲れて「早速殿様に献上だ」と殿様に鯛を献上しました。殿様は喜んで、「この鯛は立派だ。お前は今日から鯛だ」。結構各地である

ようで、宮崎で聞いた話だと、江戸時代、初めて砂糖の栽培に成功した人がいるのですね。やはり初めて成功したから「これはもう殿様に献上する」と喜んで持っていった。「砂糖が取れる。すばらしい。これから砂糖だ」と。「佐藤」ではないですよ。本当に「砂糖」です。いろいろな名字が見当たります。

面白い例で言うと、豊臣秀吉から拝領した「音揃（おんぞろ）」という変わった名字があります。もともとは「目賀（めが）」さんだったそうです。「目賀」も由緒あって水軍を率いていたのですよ。出陣するときに秀吉の前で、その出陣を見せたら音がそろっていた。感動した秀吉から「音揃」という名字をもらいました。名乗っていたのですけれども、関ヶ原の合戦後、「秀吉にもらった名字、まずくないか」という話になって、本家は「片桐」に変わったそうです。でも変えなかった家も残っています。

最後、⑧独特の例。ここまで入ってこなかった、やはり分類に当てはまらないものはあるにはあります。言い伝えがあるとか、縁起がいいものを何か考えて「明治につけてしまったよ」とか、帰化したものとかあります。ちょっとご紹介したい。「月」に「出」と書いて「朏（みかづき）」と読んでしまうのですよ。新月から最初に出た月は細いではないですか。三日月になりますよね。なので「月が出る」と書いて「みかづきさん」と読みます。

「二十里（にじゅうり）」さん。戦に負けて二〇里逃げたことで「ここなら大丈夫だ」とそこに住み着いたので、名字を「二十里」にしたと。一里というのは、昔の距離の単位で、戦前は普通に使っていました。一里四㎞で、八〇㎞走って逃げたのはすごいなと思ったら、実は一里が四㎞に決まったのは江戸時代だそうで、その昔は、里というのは地域によって違ったそうです。大体四〇〇ｍが多かった。そうすると二〇里は八㎞なので、命かかっていたら八㎞走ってみますね。

大体「うん、うちこれかな」というのは分かったのではないかと思います。ところで、沖縄以外どこにいっても名字は同じと思っていませんか。東京の方は皆さん思っているのですよね。どういうことか。全国のベストテンは「佐藤」「鈴木」「高橋」「田中」「渡辺」「伊藤」「山本」「中村」「小林」「加藤」です。まあこんなもんだと納得だと思います。東京は「鈴木」さんが多いのですよ。「鈴木」と「佐藤」がひっくり返っていますけれども、ほぼ

同じです。大阪は「田中」「山本」です。「佐藤」「鈴木」も何も入ってきません。被っているのは「高橋」と「小林」だけです。なので、関西の人は、「日本に多い名字、鈴木と佐藤だよね」と言うと「え?」という感じ。「そう?」と思う。これで驚いてはいけないですよ。宮崎は「黒木」です。宮崎のランキングは「日高」「佐藤」「長友」「田中」「児玉」「中村」「山下」です。宮崎では「山本」は消えてしまうのです。皆さん沖縄は違うというのは何となくわかっていると思います。「比嘉」「金城」「大城」「宮城」「上原」がまあ普通なのですけれども「新垣」「島袋」「平良」「玉城」「山城」。沖縄はまるっきり違います。つまり名字は結構、地域によって違っている。東京に住んでいるとあまり感じないと思いますけれども、地方の人は東京へ出てくると、とても感じます。

「上」で始まる名字、例えば「村・山・島・岡」。「かみむらさん・かみやまさん・かみしまさん・かみおかさん」。関東ではこれが圧倒的に多いです。関西では「上」に「村」と書いたら、基本「うえむら」と読むのです。「上」に「山」と書いて「うえやま」です。関西では「上」で始まると「うえ」と読むのが普通です。地図にしました(図6)。赤が「うえむら」、青が「かみむら」。関東の辺りは「かみむら」ですね。関西から中国とか九州の北全部「うえむら」です。これぐらいきっぱり分かれます。この先に行くとまた変わってしまうのが面白いのですよね。「上」という漢字の読み方はこれくらい違います。

「上」に限らず「長」「田」と書いて何と読むか(図7)。この辺り、東日本はほぼ「おさださん」です。西日本はほぼ「ながた」です。山梨県にものすごい数の「長田(おさだ)」さんがいます。東日本の「長田(おさだ)」さんのルーツは山梨に聞くことが多いです。西日本は神戸に「長田(ながた)区」というのがあったりしますから「長田(ながた)」さんは西日本の出身の可能性が高い。これなんかきっぱりわかれます。

読みだけではないです。「さいとう」さん。関西の「さいとう」は、ほとんど「斎」ではなくて「斉」です。つまり地域によって名字は同じ名字でも読み方や書き方も大きく違う。ルーツの調査はその名字がどこにあるか、どこに多いのかと調べるのが一番手っ取り早いです。「ながた」「おさだ」というメジャーな名字、「ながた」なら「ルーツは多分西だな」と思って西を調べるべきです。

それからもう一つ、戸籍というのは、誤字だらけでし

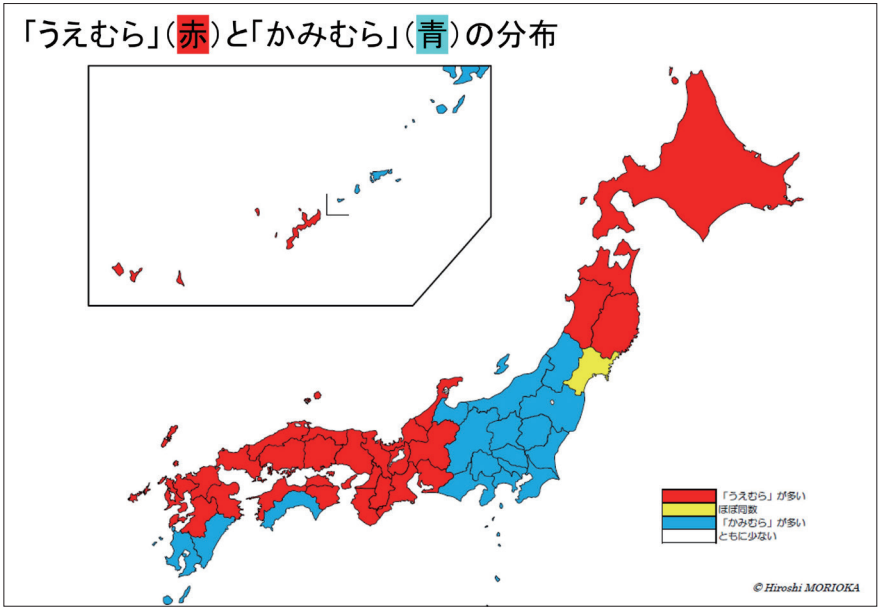


図 6 「うえむら」と「かみむら」の分布図（作成：森岡浩）

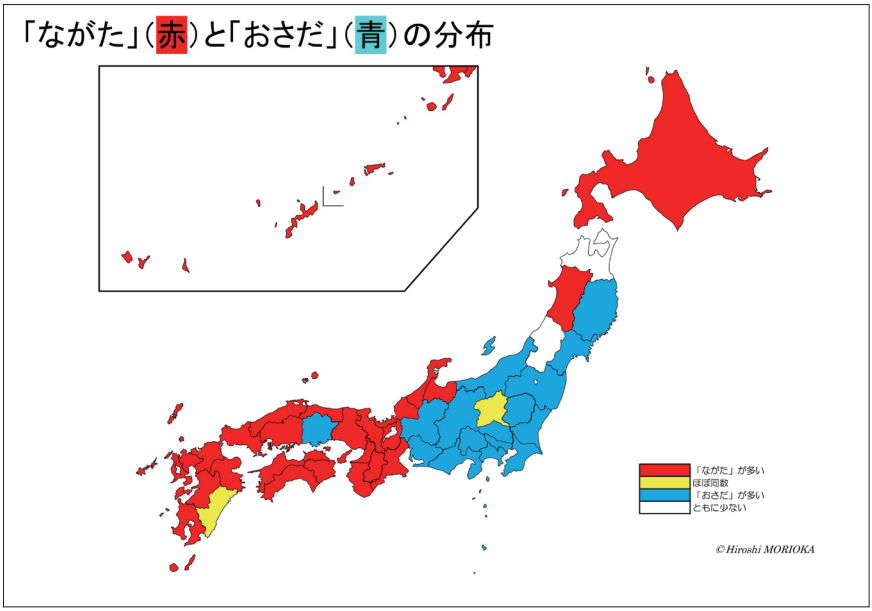


図 7 「ながた」と「おさだ」の分布図（作成：森岡浩）

た。明治の初めに戸籍ができます。明治の初めは何でも急造ですね。急に村役場ができて、村役人ができて、戸籍係ができて「お前、漢字書けるだろう」ぐらいで戸籍係の人が採用されて、みんな強制的に「名字登録しろ」と言われて、名字を登録します。でも実は、読み書きはできると言っても、一般庶民は平仮名です。漢字の読み書きができるのは武士とか、一部の商人たちで、ほとんどの人が平仮名の読み書きです。ですから「戸籍に漢字登録しろ」と言われても漢字がわからない。登録しに行くほうはそもそもあまりよくわかっていないし、戸籍係の人も日本中の漢字を全部知っているわけではないので、結構漢字を間違えてしまいます。もともと分からないこともあれば、誤字も書きぐせもある。一応「さいとう」と書いて「これでいいか」と見せないと分からないです。そもそも活字の書籍があるわけではないので、昔の人はどの字体が正しいかという認識がないのです。多少違っていても、みんな読んでいました。今は学校で、点の跳ねとか細かく教えられます。昔は大体あっていればオーケーです。歴史の勉強をした方はわかると思いますが、歴史の資料にも誤字はいっぱいありますよ。

平成の初めくらいに、戸籍はコンピューター化されます。それ以前の戸籍は明治の初めに筆で書いたものが原本でした。変えることはできなかったので、結構間違えた字があるのですよね。でも平成の初めに電算化されます。コンピューターに入れるときに、その間違えた漢字とか入らないではないですか。ではどうするのか。それぞれの役所の電算化を担当した人たちが、家に電話したそうです。「今、戸籍をコンピューターに登録しようとしています。あなたの名字ですけど、漢字が間違っています。コンピューターに登録しようとすると漢字が入りません。この機会に直しませんか」と。かなりの方が「ああ、いい機会なので直します」と言ったそうです。でも中には「いやいやいや、直さない」「もう墓に彫ってしまっている」。「今、直したらかえって別人になってしまうから」という人もいました。中には戸籍の字を見て初めて自分の名字の漢字が間違っていることを知ったという人もいます。結婚するときに、戸籍を取ってみて初めて「ええ？」という人がいる話をよく聞きます。

それからと最近は旧字体を知らない方が多いですね。私の親の世代は普通に旧字体使っていたのですけど、今、

旧字体があることをよく知らない。大学で歴史とか国語学とか昔の文献を扱う人以外は、旧字体の存在を知らない人がいます。「さわ」の字は、新字体と旧字体、意味も全く同じですけれども、今の方は難しい「澤」は別の漢字と思っている方が多いです。実は同じ漢字で同じ意味です。ルーツとか何の区別もありません。たまに「うち旧字体使っているから」と言われるのですよ。由緒が古いというわけではないです。

　せっかくなので珍しい名字も紹介します。「四月一日」は「しがつついたち」ではないです。「わたぬき」といいます。どうしてか。昔、「あわせ」というのがあるのです。「あわせ」というのは、服の中に綿が入っていて、旧暦の四月になると、「あわせ」から綿を抜いて夏用にします。お金持ちの方は、そんなことしなくても着替えればいいですが、そうではない人は使い回します。四月一日に綿を抜くので、「わたぬき」といいます。本家と分家で漢字を変えるというのは、昔は普通でした。同じ一族でも本家と分家で漢字を変えることによって、本家と分家の区別をするという習慣は全国にあります。同じ読み方だけど漢字が違う場合はそういうケースです。

　では「八月一日」。八月一日に何をするのか。旧暦の八月一日です。今の九月くらいですね。台風シーズンの前です。昔はほとんどがお百姓さんで、農家なので、旧暦の八月一日に稲の穂だけを摘んで神様にお供えして「今年も台風が来ませんように」「無事豊作でありますように」とお祈りをします。八月一日に穂を摘んだので「ほづみさん」。これは結構全国各地にありますよ。群馬県が多いですけれども、割と各地にあります。

　それから「鴨脚（いちょう）」というのは京都の名字です。下鴨神社の神官の名字。鴨の脚はどんな形しているか。水鳥なので水かきがあります。鴨の脚が何に似ているかという話です。今ちょうど、この季節紅葉しているイチョウに似ていると思いませんか。「いちょう」さんといいます。京都らしいというか何というか。

　ほかにも珍しいのがたくさんありますけれども、由来のわかるものというのは少ないですね。珍しい名字は基本的に由来がわからないものが多いです。なぜかというと、珍しい名字は、先祖の誰かが「こういう名字にしよう」と思って決めました。それが伝わっていないとわからないです。親から子へ、子から孫へと伝えていかない

と途切れてしまいます。たくさんある名字だと一軒や二軒伝わらなくても他の人がいますから、子孫に伝わっていきます。極端に言うと、一軒しかない名字は、そこで伝わるのが終わってしまったらもう誰もわからないです。よく私も聞かれます。地方に行ってすごく珍しい名字の方に「私の名字、こんな名字です、由来は何でしょうか」と。それは私が教えてほしいです。

最後です。せっかくなので国分寺の名字のランキング作りました。もう東京とほとんど同で、やはり国分寺も、よそから移り住んだ方が多いですね。この中で「本多」という名字、珍しい名字ではないですが、二二位に入るというのはめったにないです。東京でも国分寺だけです。地元に「本多」さんという名家がありますけど、国分寺市に「本多」という地名がありますね。最初は名字と地名が同じだったら地名が先で、そこに住んだから名字ができたというお話をしましたが、実は東京ではそれに当てはまらないケースが結構あります。国分寺市の「本多」は本多さんが開墾した土地が「本多新田」。「新田」が取れて「本多」になった。国分寺市の場合はの名字が先です。あとは、特に国分寺だから多いというのはあまりなさそうです。国分寺のように戦後よそから来た人が増えたところでも、こういうのは残っているのですね。

ということで皆さん、名字の由来分かっている方もいればわからない方もいるし、これから調べてみようという人もいると思います。名字のことを調べてわかったらぜひ次の世代に残してください。特に珍しい名字とかだったら、今残さなかったら途絶えてしまいます。なのでぜひこれは皆さん、わかったら紙に残すなりインターネットにアップするなり、何かして残していただければと思います。本日は長い時間ありがとうございました。

もりおか　ひろし　名字研究家

【開催情報】

国分寺市制施行六〇周年記念・市史編さん着手記念講演会

演　題：名字のルーツにみる日本人のくらしと文化

日　時：令和六年一二月七日（土）

会　場：リオンホール